

Nos. 27, 28

(June, 1975)

日本産タマムシ科概説 (14)

黒沢良彦

47. *A. subrobustus* E. SAUNDERS, 1873 ネムノキナガタマムシ 分布：日本（本州，四国，九州，対馬，屋久島），琉球（吐喝喇列島），朝鮮，中国，台湾。体長4～6.5mm。唐金色，時に銅色や緑を帯びる。内側隆線は短く，軽く弯曲し，後方 $\frac{1}{3}$ の所で消失する。前胸側縁は弯曲弱く，前方に向け狭まる。翅鞘は肩部から翅端にかけて，会合線に沿って，灰白色短毛からなる縦帯があるが，その強弱は個体差が多く，ほとんど消失しかかったものもある。雄の顔面は緑色。ネムノキの害虫で5～8月に出現する。台湾産は緑色が強く，翅鞘の背面の凹みが強く，亜種 *sorocinus* KERREMANS, 1913 に属する。吐喝喇列島産は，かつて私は台湾産と同一亜種にした（日本昆虫大図鑑，II）が，翅鞘の条斑が薄い傾向はあるが，日本産に大体一致し，台湾亜種ではない。

A. subrobustus E. SAUNDERS, 1873 を私は記載だけで別種のルイスナガタマムシ *A. lewisi* KERREMANS, 1903 に当て，本種は台湾の *A. sorocinus* KERREMANS, 1913 の亜種と考えて，日本産のものに *albizziae* Y. KUROSAWA, 1963 と云う新亜種名を与えたが，大英博物館にある模式標本は間違いなく，私がネムノキナガタマムシとした種類の雌（長崎産）である。従って，本種の種名は *subrobustus* E. SAUNDERS, 1873 で，*A. sorocinus albizziae* Y. KUROSAWA, 1963 は全くのシノニムとなる。同様にクマモトナガタマムシ *A. kumamotoensis* OBENBERGER, 1935，ペップナガタマムシ *A. beppuensis* OBENBERGER, 1936 も共に本種のシノニムで，前者の模式標本は雄，後者のそれは雌であった。この誤は，原記載に無理に西日本型のルイスナガタマムシを当てた私の不注意に基づくものである。なお，原記載には“head green in front”とあり，これは明らかに雄の特徴で，雌は頭頂や前胸背と同様に銅色であるが，大英博物館の模式標本は Oak Nagasaki のラベルのある雌一頭だけである。また，模式標本のラベルや原記載に on oaks とあるが，本種がナラやカシワ類あるいはカシ類につくことはないので，単に G. LEWIS がこの類の葉上で

捕ったと記しただけであろう。

48. *A. suvorovi* OBENBERGER, 1935 ヤナギナガタマムシ 分布：日本（北海道，本州），朝鮮，満洲，シベリア東部，中国（北部），モンゴル，中央アジア，ヨーロッパ。体長6～10mm。内側隆線は弧状で，短いが，不明瞭で，時にほとんど消失することがある。頭楯は幅広く，触角窩間の幅は長さの約2倍。色彩は変化多く，通常緑色であるが，青色のもの（f. *raddei* OBENBERGER, 1935），唐金色のもの，（型名は付けられてない），黒色のもの（f. *charbinensis* OBENBERGER, 1935）などがある。原産地はウッスリー，*raddei* も同様であるが，*charbinensis* はその名の通り，満洲北部のハルビンの産である。私は OBENBERGER の模式標本の他に，満洲の琿春，開原，ヤプロニア，北朝鮮の朱乙，赴戦高原，中国山東省の嶗山などの標本を検した。日本産は大陸産のものより翅端が広く，側方への膨出が弱く，会合線側がやや角張ることで区別され，亜種 *salicivora* Y. KUROSAWA, 1963（原記載には *salicivola* と誤記）と云う。福島県会津若松市郊外の青木山で1948年5月に私が採った3♂♂2♀♀に基づいて記載したもので，他に北海道足寄および札幌，山形県新庄市，大石田市，および東根市，新潟県十日町市などの標本を検した。山形県の標本は全部最上川畔のヤナギ類から6～7月に得られたものである。幼虫はヤナギ類に加害するが，主としてコリヤナギ，ケショウヤナギなど細葉の種類を好み，キツネヤナギやミネヤナギのような広葉の種類を好まない。また，ポプラにも加害するようであるが，これは，酷似種のルイスナガタマムシの幼虫かも知れない。OBENBERGER によるとフランスから *A. viridis* LINNÉ の変種として記載された *populnea* SCHAEFER, 1949 は *viridis* ではなく，本種のヨーロッパ亜種で，中央アジアからヨーロッパに広く分布すると云う。また，彼によれば，私が書いた日本のものは真の *suvorovi* ではないと云うが，この問題は将来の詳しい検討に待つことにして，ここでは本種の種名には一応 *suvorovi* を用いておく。

本種は前記の通り、ルイスナガタマムシ *A. lewisi* KERREMANS に酷似しており、頭楯の幅だけで区別出来るが、両種の関係についても将来の詳しい検討が必要であろう。

49. *A. tempestivus* LEWIS, 1892 ウグイスナガタマムシ 分布：日本（本州，四国，九州，対馬，屋久島）。体長4～7mm。暗オリーブ緑色，前胸背の側方は金色を帯びる。細形で，内側隆線は強く波曲し長い。G. LEWIS の第2回目の来日の折に採集した標本に基づいて記載されたもので，原産地は碓氷峠，福井および中禅寺となっているが，大英博物館に保管される標本は1♂だけで，“Kurigahara, 4. viii-6. viii. '81”とラベルがついている。この産地は日付から推定すると碓氷峠に近い群馬県のどこかと思われるが，私には詳でない。加害植物はカエデ類ではないかと推定しているが，確証はない。一般に関東以西の西日本では6,7月頃普通であるが東北地方では少ない。北のものは色彩が暗いが，西日本のものは明るい色のものが多く，銅色や唐金色を帯びたものが現れる。屋久島のものは鉄錆色を帯びるので亜種を分けられるかも知れない。

50. *A. tibialis* LEWIS, 1892 ホソアシナガタマムシ 分布：日本（北海道，本州，四国，九州，佐渡，対馬），朝鮮，満洲，シベリア東部，中国（北部）。体長5～8mm。日本産ナガタマムシ属の中で最も地方的な色彩変化の多い種類で，草色，青緑色，青色，紺色，唐金色，鉄錆色，黒色などいろいろある。下側隆線は後方巧の所で側隆線に合ってしまう。腹端は2葉片状。LEWIS は北海道の葎菜沼と札幌で得た唐金色のものを *A. tibialis*, 日光，箱根宮の下，奈良などで得た暗青色のものを *A. gracilipes* と，それぞれ独立した別種として記載したが，両者の色彩は一連の中間的色彩の個体で連続してしまい，日本国内では本種の亜種を分けることは不可能である。一般に，北海道産は唐金色のものが多く，道南地方から青森県にかけては草色やオリーブ色を帯びたものが多くなる。東北地方でも中南部になると青色が強くなって来て，関東地方や中部地方ではほとんどが青色のものがかりになるが，地方的にはオリーブ色のものが多い地方もあり，岩手県北上山地のように鉄錆色のものが多く現れる地域もある。近畿，中国地方は青色または紺色の地域で，九州，四国では美しい青色または紺色になる。また，対馬のものは暗青色または暗青緑色のものが大部分である。朝鮮南部でも対馬に似たものが現れると思われるが，資料不足で断言出来ない。北鮮から満洲，アムール，ウスリーにかけては鉄錆色のものがかりになる。黒色のものは地域に関係なく現れるが，青色の地域には特に多い。

LEWIS の記載した *tibialis* の模式標本は葎菜沼産の♀，大英博物館には他に2♀♀があるが，札幌産の標本はない。*gracilipes* は日光，3. vi. ~21. vi. '80 のラベルのある♀1頭だけで，他の産地のものは残っていない。*A. gracilipes* LEWIS, 1892 は

中米から記載された *A. gracilipes* WATERHOUSE, 1889 に先占されているので CH. KERREMANS は1902年に *lewisiellus* と改名したが，上記の通り，この名は *tibialis* の青または紺色の型として残るだけである。中部地方から東北地方，北海道にかけては最も普通な種類で，関西地方や中国地方でも山地では稀な種類ではないが，九州南部，四国などでは稀な種類で，紀伊半島でも同様である。この様な分布の仕方は周日本海種の典型である。

シベリア東部の Schilka 山地から記載され，ウスリーからも記録のある *A. ignoratus* OBNENBERGER, 1924 は模式標本が *tibialis* の大陸型の♀であった。従って，本種の大陸亜種名は *ignoratus* で代表されるであろう。*A. taigicola* OBNENBERGER, 1924, *corax* OBNENBERGER, 1924, *prinadai* FISHER, 1925, *freyi* THÉRY, 1939 もすべて *A. tibialis ignoratus* OBNENBERGER, 1924 の異名である。また G. KRIVOLUTSKAYA 女史が1973年に千島国後島から記録した *A. ignoratus* も上記の事情から推定して北海道の *tibialis* そのものと見做して差支えないであろう。また，1940年に三輪勇四郎，中条道夫両博士が朝鮮のソールから記録した *A. ignoratus* も *tibialis* の大陸型であろう。OBNENBERGER が *A. asiaticus* KERREMANS と考えたのは A. THÉRY が1942年に指摘した通り，全部が本種の大陸型であった。そこで彼は真の *asiaticus* に *planefasciatus* と云う新名を与えたのであろう。

加害植物はナラ，クヌギ，カシワなど落葉性の *Quercus* 属植物であるが，常緑の種類にも加害するのかどうかはまだ判らない。5～7月に伐木や若葉で見られるが，私は山形県米沢市でカシワの根元にある石の下から数頭の成虫を採集したことがある。これは，初夏に発生したものが石下に潜入したのか，チビタマムシ類のように夏の終り頃発生した新成虫が越冬していたものか，その後この様な機会がなく，はっきりしない。

51. *A. trinotatus* E. SAUNDERS, 1873 ミツボシナガタマムシ 分布：日本（本州，四国，九州）。体長4.5～6.0mm。銅色を帯びた唐金色または紫銅色，内側隆線は弱く，軽く弯曲し，中央部で消失する。腹端は2葉片状。翅端巧の所の会合部に2つの小白毛斑があり，その前方中央直後の所にぼやけた大きな白毛斑があるが，この紋は時に全く消失する。大英博物館にある模式標本は♀で Japan のラベルがあるだけで，詳しい産地は判らないが，LEWIS の第1回の旅行の採集品であるから，恐らく長崎付近であろう。幼虫は前種とは逆に常緑のカシワにつくが，恐らくクヌギにもつくであろう。西日本に多い種類で，現在判っている北限は東京であるが，その分布はカシワ類の分布に平行するものであろう。成虫は5～7月に現れる。

52. *A. uenoi* Y. KUROSAWA, 1963 ウエノナガタマムシ 分布：日本（九州，屋久島，吐喝喇列島），琉球（奄美大島）。体長3.0～4.7mm。日本産ナ

ガタマシ属中では最小種。短太で唐金色で前胸背中央部が暗色となり、♂の顔面は緑色。内側隆線は長く前縁角に達するが、側面から見ると全く波曲しない。下側隆線は後方 $\frac{1}{2}$ で側隆線に合する。佐世保市国見山の1♂、屋久島栗生の1♀、吐喝喇中之島の1♂1♀、奄美大島のイカリ産1♂4♀♀に基づいて記載したものである。加害植物は未知であるが、恐らくシイであろう。九州西海岸地方および南端地方、種子島、さらに四国南岸地方などにも産するものと期待される。

53. *A. viduus* KERREMANS, 1913 ベニナガタマムシ 分布：日本（本州，九州，対馬），満洲，中国，台湾。体長5~10mm。大小の変化が著しい。全体紅赤色，灰白色の短毛よりなる縦条が小楯板付近から翅端にかけて走るが，個体変化が多く，全く消失するものも少なくない。一般に台湾の亜種は顕著なものが多く，日本産は弱く，大陸の亜種では消えるものが多い。内側隆線は短く湾曲するが，日本産は台湾のものより短く湾曲が強い。下側隆線は側隆線に合しない。原亜種は台湾産で産地は Kankau と恒春であるが，全島の低山地に普通に産するようである。日本亜種 *subviduus* Y. KUROSAWA, 1957 は新潟県中津川渓谷，山梨県昇仙峡，長野県裾花峡，木曾福島，鳥取県大山などの標本に基づき記載されたものであるが，東北地方南部から中国地方に到る本州各地と対馬に産する。しかし，九州，四国，紀伊半島などの外弯山系からの記録は全くない。大陸産のものは満洲の大興安嶺から独立種として記載された *chinganicus* OBENBERGER, 1922 で代表されるが，別種ではない。他に北京，熱河省古北口，山西省陽城などの標本を検しているが，朝鮮から満洲東部にかけての地域の標本はまだ検していない。加害植物は台湾ではケヤキ，対馬でもケヤキで採集した。中津川渓谷の *subviduus* の模式標本は4♂♂2♀♀をクリの伐木上で得たが，これは幼虫の加害樹ではないであろう。田添京二氏は福島市郊外でエノキから採集された。北京ではハルニレの一種 *Ulmus wilsoniana* を加害するので，日本でもハルニレには加害するであろう。

54. *A. viridiobsculus* E. SAUNDERS, 1873 アオグロナガタマムシ 分布：日本（本州，四国，九州）。体長3~5mm。ウエノナガタマムシに匹敵する小型種であるが，同種よりはやや大型のものが多い。短太，暗緑色で前胸背の側縁部は多少金色を帯び，翅鞘背面は一面ににぎい金色の短毛を密布する。内側隆線は長く波曲し，前縁角近くで側隆線に合する。大英博物館の模式標本は♀で，Japan と云うラベルがついているだけであるが，LEWIS の第1回の採集品であるから長崎付近か神戸付近であろう。東北地方南部から九州まで分布し，西日本では少なくとも，目下の所日本特産種である。最北の記録は福島市である。加害植物はまだはっきりしない。

55. *A. yamawakii* Y. KUROSAWA, 1957 コクロナガタマムシ 分布：日本（本州，御蔵島，四

国，九州，対馬，屋久島），朝鮮。体長7~12mm。やや唐金色を帯びた光沢のない黒色，翅鞘には灰色の短毛からなる中央の小紋，後方 $\frac{1}{2}$ にある波状帯，翅端紋などが認められるが，いずれも不明瞭で，時には全く消失することもある。北九州市福智山で野村美之（旧姓山脇好之）氏が採集した2♂♂4♀♀などに基づいて記載したもので，奈良県大台原山，四国面河溪，大分県祖母山，鹿児島県霧島山，伊豆御蔵島，福島県二本松市，屋久島花之江河などの標本を検し，対馬仁位では私自身で数頭を採集している。また，朝鮮雪岳山産の1♀(13. viii. 1974, S. TERAMURA 採集)も検した。本州では奈良県と福島県以外に記録がないが，恐らく稀ながら関東以西の各地に分布しているのであろう。加害植物は極めて特異で，私の対馬での観察ではウリノキ科のウリノキであろう。

56. *A. yasumatsui* Y. KUROSAWA, 1964 ヤスマツナガタマムシ 分布：琉球（奄美大島）。体長4mm内外。唐金色，前胸背は明るく，翅鞘は暗い。翅鞘は短い銀灰色毛で覆われるが両側方は裸出する。内側隆線は短いが強く湾曲，下側隆線は後方後縁角近くで側隆線に合する。葉状部の前縁は深く切れ込み，腹端は深く三角形にえぐられる。奄美大島の Yakkachi で安松京三先生が1933年7月18日に採集された1♂だけにに基づいて記載したもので，他の標本を知らない。

先に記した通り，ナガタマムシ属は極めて種類が多く，日本産も上記56種だけではないが，大陸産の種類と比較が済んでない部分が多く，同定には極めて困難している。中根猛彦氏に云われるまでもなく，いずれ検索表をつけて整理したく思っている。

なお，下記の種類は日本産として記録されたが，日本産とは考えられないので省くことにした。

A. tripartitus japonensis OBENBERGER, 1935 ニホンナガタマムシ 単に Japon と云うラベルのついた1♀で記載されたものであるが，模式標本には誰が書いたか判らないが，OBENBERGER の字体とは異なる字体で "Sumatra ou Borneo non Japon" と書かれた紙片がついている。*A. tripartitus* H. DEYROLLE, 1864 はマレー半島，スマトラ，ボルネオなどから知られる5mm内外の小型種で，鋼鉄様青色か翅鞘は暗い唐金色，翅端は鋭く棘状に尖り，その外方に1個の小歯状突起がある特異な種類で，私は日本産はおろか台湾産の種類でもこれに当る標本を見たことがない。三輪・中条両博士は日本産甲虫目録，I，タマムシ科（1936）の中で独立種とし，スベルを *japonensis* と誤記されているが，なぜ独立種とされたかその理由は記されていない。私がブラハの国立博物館で検した模式標本は *tripartitus* と較べて差異が見出せなかったもので，後からつけられた紙片のただし書きの方が正しいものである。

A. vodaki OBENBERGER, 1936 ヴオダクナガタマムシ 先のクマガナガタマムシ *A. friebi* OBENBERGER の項で記した様にこれが果して真に日本産

かどうか疑わしい。恐らく、OBENBERGER の死後、標本の指定の際に混乱したものであろう。

A. japonicus KERREMANS, 1898 パリ国立自然科学博物館にある模式標本1♀と大英博物館にある syntype 2頭は共に *A. tibialis* LEWIS, 1892 ホソアシナガタマムシの北海道型の原型に一致する。私が *japonicus* に当たると考えた種類（原色昆虫大図鑑, II, 76図版23図）トガリカラカネナガタマムシは全く別物で、中国に近似種があるが、未命名の種類である。（国立科学博物館）

○オオヒラタエンマムシの蛹

樹皮下で生活するオオヒラタエンマムシ *Hololepta amurensis* REITTER の蛹は写真に示すように、その形がまことに興味深い。よく発達した大腮（口器）を前方へ向け、成虫の頭部と同様の形を保っていることである。（同属の他種もおそらく同形であろう）。この蛹の形は頭部と胸部が重ならないため、からだを扁平にする上で有利さがあるが、むしろ成虫の頭胸部の構造からの必然性があるように思われる。しかし、周知のように甲虫類の蛹は口器が後方を向くのが普通であり、ヒラタムシ科のように扁平な甲虫でも蛹の口器はすべて後方を向いている。筆者はエンマムシ科の蛹の多くをみていないが、枯れたマツの樹皮下に住むナガエンマムシ *Cylister lineicollis* MARSEUL も、口器は法則通り後方を向いている。

写真に示すオオヒラタエンマムシは埼玉県二瀬（奥秩父）で1971年9月21日に枯木の樹皮下から幼虫を採集飼育したもので、同年11月5日に蛹化した。前記ナガエンマムシは12月中旬に神奈川県で蛹を採集した。いずれも幼虫は樹皮下の昆虫を捕食する。



（横浜市港北区，林長閑）

○「北日本におけるフタオビミドリトラカミキリの分布」補遺

本誌25/26号で、筆者はフタオビミドリトラカミキリの分布について述べたが、その後、さらにいくつかの重要文献を見出したので、ここに補遺を発表しておきたい。

1. 富山県からの記録

富山県からの記録はないと記したが、田中(1972)は下新川郡朝日町から本種を記録しているので追加する。これで、石川県～青森県の全県下からフタオ

ビミドリトラカミキリが知られたことになる。

田中忠次(1972)かみきりむり科の追加, *Amica*, 16(1):10~11.

2. 山形県からの記録

山形県における本種の産地として、白畑(1954)による酒田の記録（飛鳥からの記録を含む）があるので追加する。また山形県本上からは黒沢、白畑(1964)による加茂からの記録が最初であると記したが、上述の如く白畑の記録の方が古いので訂正する。

白畑孝太郎(1954)山形県産甲虫類分布資料(1), 新昆虫, 7(2):40. (埼玉県入間郡, 大野正男)

○コメツキムシ数種の記録。

(1) *Meristhus (Sulcimerus) nipponensis* LEWIS, 1894, スナサビキコリ

1♂, 京都府丹後神崎, 2. viii. 1974, 正木清採集。

本種は新潟, 京都, 大阪, 和歌山, 鳥取, 福岡, 長崎等から知られている小型のサビキコリで、主に、海岸や河川敷の砂地に生息している。本個体は海岸近くの水銀燈に飛来したものである。

(2) *Heteroderes inexpectatus* KISHII, 1969

1♀, 茨城県阿見町, 13. viii. 1962, 木村裕採集。

岸井氏により1969年に、茨城県阿見町から採集された1♂に基づいて記載されたもので、日本では本属の種としてははじめてである。その後採集された記録は見あたらない。筆者は偶然にも、同一場所で同一採集者による標本を入手した。本種は少なくとも、同時期に複数採集された様である。

(3) *Megapenthes cariniceps* LEWIS, 1894, クロホソキコメツキ,

1♂, 京都広河原, 24. v. 1972, 今坂正一採集;

1♀, 山梨県大菩薩峠, 25. vi. 1966, 辻啓介採集; 1♀, 奈良市奈良公園, 12. v. 1974, 今坂昭一採集。

G. LEWIS により1894年(Kiga)に記載された以後、三輪博士のモノグラフ(1934)に札幌, 中禅寺の記録があるのみで、その後は知られていない。

(4) *Megapenthes shirozui* KISHII, 1959, シロウズツヤケシコメツキ

1♂, 奈良市奈良公園, 19. vii. 1974, 畑山武一郎採集。

屋久島から知られていたが最近大平博士(1973)による護摩壇山の記録があり、本州では2頭目の記録である。

(5) *Ampedus honguanus* ÔHIRA, 1962, ホングウチビクロコメツキ

1♂, 高知県黒尊, 2. viii. 1973, 奥田則雄採集。

大平博士(1962)により愛知県本宮山で採集された1♂により記載され、その後岸井氏は那智(1972), 平松氏は大台ヶ原(1974)をそれぞれ産地として記録されているが、四国からは初めての記録である。

標本を提供していただいた、今坂正一, 奥田則雄, 畑山武一郎の諸氏, 同定ならびに、種々御教示いただいた平安高校の岸井尚先生にお礼申しあげます。(京都市伏見区, 正木 清)

Dr. A. VILLIERS の “Une nouvelle nomenclature de
Lepturines de France” について——紹介と感想

中 根 猛 彦

一般に学名については欧州の人達は慣用を重んずるが、米国の人は命名規約の適用に厳正な立場をとる傾向があるようである。ハナカミキリに関しても戦後 GRESSITT らが属のタイプを検討して慣用の誤りを指摘しているが、欧州ではその後も学名はほとんど変更なしに使用されている。学名の安定ということからいえば大変結構なことであるが、命名規約上からは妥当とはいえない。

ここに紹介する Dr. VILLIERS の報文*) は長年にわたる誤まった慣用から脱して規約に準じた学名を用いることを提案したものである。このきっかけは VILLIERS (1964) の北米産 ハナカミキリの属タイプ種に関する考証のようであるが、いずれは必要なことであらう。内容的には特に新しい特徴を用いているわけではないが、今後の欧州での動向が注目される。

以下彼の示した検索に属のタイプ種を加えて紹介しておこう。最後あたりに出てくる 2 属は新たに命名されたものである。

1. 上翅は完全に正常か腹部大半をおおう。後翅はたたまれる。中胸背鱗部は 2 分される…………… 2
- 上翅は短縮し貝殻状、腹部をおおわない。後翅はたたまれない。中胸背鱗部は完全に 2 分されない…………… Tribe: Necydalini
2. 眼の小眼は細かい。中基節は多少とも離れる…………… 3
- 眼の小眼は粗い。中基節はほぼ相接する。…………… Tribe: Vesperini
3. 前胸板は前方が広く凹圧され、横から見て前胸突起と明らかに角をなす。…………… Tribe: Rhagiini
- 前胸板は前部が狭くくびれるか凹圧され、横から見て前胸突起と明らかな角をなさない…………… Tribe: Lepturini

Tribe Vesperini Mulsant, 1839

- 1 属だけ (Type: *Stenocorus strepens* F.)……………
- …………… *Vesperus* Latr., 1829

Tribe Rhagiini Kirby, 1837

(= *Stenocorini* auctt.)

1. 上翅には強い縦隆条がある…………… 2
- 上翅には強い隆条はない…………… 3
2. 上翅には 3 隆条がある。前胸突起は幅広く、ほぼ基節の高さで後端は切断状 (Type: *Cerambyx inquisitor* L.) (= *Hargium* Samouelle, & C)……………
- …………… *Rhagium* F., 1775
- 上翅は外方の隆条だけ強い。前胸突起は幅狭く、

*) VILLIERS, A: Une nouvelle nomenclature des Lepturines de France (Col. Cerambycidae), 1974, L'Entomologiste, 30 (6), pp. 207~217.

- 基節より低く、後端は丸まる (Type: *Cerambyx cursor* L.)…………… *Oxymirus* Muls., 1839
3. 中、後腿節は歯突起がない…………… 4
 - 中、後腿節は先端に近く歯突起がある (Type: *Toxotus cinctus* F.)…………… *Akimerus* Serv., 1835
 4. 前胸背は両側に側突起がある…………… 5
 - 前胸背両側は単に丸まる…………… 11
 5. 触角第 3 節は第 4 節より明らかに長い…………… 7
 - 触角第 3 節と第 4 節はほぼ同長…………… 9
 6. 体は太短い。前胸の側突起は丸い瘤状 (Type: *Leptura virginea* L.) (= *Neogaurotes* Podany)……………
 - …………… *Carilia* Muls., 1863
 - 体は細長。前胸の側突起は幅広い三角で鈍く平たい (Type: *Rhagium salicis* F.)……………
 - …………… *Rhamnusium* Latr., 1829
 7. 後附節第 3 節は中央まで弯入する…………… 8
 - 後附節第 3 節の弯入は中央に達しない (Type: *Leptura octomaculata* F.) (= *Argaleus* LeC.)……………
 - …………… *Pachyta* Dej., 1821
 8. 上翅端は弯入するか切断状…………… 9
 - 上翅端は円い…………… 10
 9. 触角第 3 節は少なくとも第 5 節と同長 (♂♀は似ている) (Type: *Leptura meridiana* L.) (= *Toxotus* Dej., *Minaderus* Muls.)……………
 - …………… *Stenocorus* F., 1775
 - 触角第 3 節は第 5 節より明らかに短い (♂♀でちがう) (Type: *Cerambyx quercus* Goetze)……………
 - …………… *Anisorus* Muls., 1863
 10. 後附節第 3 節は続く 2 節の和より長い。触角は細い (Type: *Leptura monticola* Randall) (= *Evodinellus* Plavil., *Brachytodes* Planet)……………
 - …………… *Evodinus* LeC., 1850
 - 後附節第 3 節はせいぜい続く 2 節の和と同長。触角は太い (Type: *Leptura interrogationis* L.)……………
 - …………… *Brachyta* Fairm., 1864
 11. 前胸背は襟状の前縁後に幅広い横の凹みがある…………… 12
 - 前胸背は前部が単に縁取られ、襟状の横の凹みはない (Type: *Leptura collaris* L.)……………
 - …………… *Dinoptera* Muls., 1863
 12. 触角は眼の前縁前方につく……………
 - 触角は両眼間につく (Type: *Leptura lurida* F.)…………… *Pidonina* Muls., 1863
 13. 上翅背部は凸形、細長く、基部の幅の 2~2 ¼ 倍の長さ。触角隆起先端から頭楯前端までの距離は頬部の頭幅より大きくない (Type: *Leptura proteus* Kirby)…………… *Acmaeops* LeC., 1850
 - 上翅は会合部に沿い広く圧せられ、短く、基部

の幅の1/4ぐらゐの長さ。触角隆起先端から頭楯
 前端までの距離は頰部の頭幅の1/2倍 (Type :
Leptura pratensis LAICHTG.)
 *Gnathacmaeops* LINS. & CHEMS., 1972

Tribe Lepturini KIRBY, 1837

1. 大腮基部は眼にきわめて近い..... 2
 — 大腮基部は眼から離れている..... 3
2. 前胸背は襟状の前縁後に横の凹も正中溝もな
 い(Type : *Leptura praeusta* F.)
 *Grammoptera* SERV., 1835
 — 前胸背は襟状の前縁後に横凹と正中溝がある…
 (Type : *Grammoptera spinulosa* MULS.).....
 *Cortodera* MALS., 1863
3. 前胸後角は直角か、鈍角で上翅基縁と角をなす
 か、いずれにせよ上翅基部を抱かない..... 4
 — 前胸は後方が拡がり、後角は尖り上翅基部を抱
 く.....13
4. 上翅端は湾入するか、明らかに切断状。外角は
 鋭い..... 9
 — 上翅端はほぼ円いか、やや切断状で外角は尖ら
 ない..... 5
5. 触角第2～4節の和は第6節より長い..... 6
 — 触角第2～4節の和は第6節とほぼ同長.....
 (Type : *C. lineata* LETZN.) (= *Letzneria* KR.)
 *Cornumutila* LETZNER, 1843
6. 側頭は短く、丸まるか後方で鈍く角ばる..... 7
 — 側頭は長く、後方でやや鋭く角ばる (Type :
Leptura sexguttata F.).....
 *Anoplodera* MULS., 1839
7. 触角は細長、端方の大半の節はやや太まり、♂
 では翅端に達する。前胸背後角はやや鋭い(Type :
Leptura tabacicolor DEG.).....
 *Alosterna* MULS., 1863
 — 触角は短く、端方大半の節は強く太まり、♂で
 も翅端に達しない。前胸後角は鈍い..... 8
8. 小楯板後端は湾入し、ときに2又 (Type : *P.*
orientalis PLAVILST.).....
 *Pseudalosterna* PLAVILST., 1934
 — 小楯板後端は半卵円形で湾入しない (Type :
Leptura unipunctata F.) (= *Neovadonia* KASZ.)
 *Vadonia* MULS., 1863
9. 体は全面に灰～淡緑色の密なねた毛におおわれ
 る (Type : *Leptura virens* L.)
 *Lepturobosca* REITTER, 1913
 — 体には上のような毛はない.....10
10. 前胸背と上翅基部は小～中位の点刻と細長い
 直立～ややねた毛を密にもつ.....11
 — 前胸背と上翅基部は粗く深い孔状点刻をもち、
 各点は太短い毛を1本ずつもつ (Type : *Leptura*
cribripennis LEC.)...*Stictoleptura* CASEY, 1924
11. 前胸背面は凸形で切断された円錐形、側部は
 後方に瘤起がない.....12
 — 前胸背は背面がやや平たく、側部は後方の横溝

- 前に横にはり出す瘤起がある (Type : *Leptura*
rubra L.) (= *Aredolpona* NAK. et OHB.).....
 *Corymbia* DEGOZIS, 1886
12. 前胸は幅狭く、基部から前端へ規則的に狭ま
 る。♂♀の色・形は異なる (♂は細く後方へ狭ま
 り、♀は幅広く両側ほぼ平行) (Type : *Leptura*
sanguinea LEC.) (= *Marthaleptura* OHB.).....
 *Anastrangalia* CASEY, 1924
 — 前胸は幅広く、両側は後半が両側平行か後方
 へ狭まり、前方は急に狭まる。♂♀の差はあまり
 ない (Type : *Leptura vagans* OL.)
 *Brachyleptura* CASEY, 1913
 13. 上翅端は斜めに切断され、外角は鋭く尖る …
15
 — 上翅端は円い14
 14. 前胸背基部はY形に強く圧下される。後体部
 は短く幅広い (Type : *Leptura cerambyciformis*
 SCHR.) *Pachytodes* PIC, 1891
 — 前胸背基部は強く凹まない、後体部は長い
 (Type : *Leptura sexmaculata* L.)
 *Judolia* MULS., 1863
 15. 後跗節第3節はかなり短く、著しい2片状…16
 — 後跗節第3節はきわめて長く、先端は湾入する
 が明らかな2片状でない (Type : *Leptura lutei-*
cornis F.) (= *Strangalina* AURIV.)
 *Strangalia* SERV., 1835
 16. 後跗節第1節下面は滑らかな正中線で2分
 された毛帯をもつ (Type : *P. kassjanowi* SOKO-
 LOW) (= *Sphenalia* DANJEL)
 *Pedostrangalia* SOKOLOW, 1896
 — 後跗節第1節下面にこのような特徴はない…17
 17. 前胸背の襟状の前縁は直後に平たい帯状部を
 伴ない凸形部前に横溝をつくる.....18
 — 前胸背の凸形部は襟状部からはじまる (Type :
Leptura melanura L.)...*Stenurella* VILL., 1974
 18. 前胸背基部には強い凹みがあり、かなり幅広
 いが背部で急に圧下される (Type : *Leptura*
quadrifasciata L.) *Leptura* L., 1758
 — 前胸背基部には浅いが幅広い凹みがある (Type :
Leprura distigma CHARP.)
 *Nustera* VILL., 1974

Tribe Necydalini LATREILLE, 1825

1属だけ (Type : 確定せず) ... *Necydalis* L., 1758

以上を日本の現状と比較すると、愉快なことに大
 体は合致しているようである。属、亜属の格づけは
 慣用や個人的な好みも加味されるから、特に問題に
 しないでよいだろう。今後の問題は欧州～北米以外
 から知られる属種との関係であると思われる。なお
 ちよつと気になるのは、*Strangalia* のタイプと長
 く見なされていた *S. maculata* が *Leptura* にそ
 のまま居残っている点である。(国立科学博物館)

日本産 *Pidonia* 属の覚え書 (6)

大船林道の *Pidonia* 属

窪木 幹夫

火山の噴火は種々の潰滅的影響を植生に与える。すなわち、広域にわたる火山灰の堆積による地表植物群落の死、溶岩の噴出と岩石荒地の形成、溶結凝灰岩の噴出と地域生物群の絶滅によって、それまでとは異なった生態環境をつくりだす。九重山群とそれを取巻く高原は、標高800m以上1700mを越える山地帯で、その形成過程は比較的新しく、森林は九州全体からみれば、落葉広葉樹の林冠と常緑グラノイド帯を密生した林床からなる地帯と山頂部のまばらな低木林地帯とされ、古田(1965)の九州中北部森林帯のクマシデ=コガクツギ群集からブナ=スズメタケ群集の山地帯極盛相地帯に入る。しかし、九重地域の森林植物社会は火山活動の影響を強く受け、ブナのあるべき落葉広葉樹林の林冠は、ミズナラまたは、ノリウツギ低木林に置き換えられ、山頂部はミヤマキリシマ、アセビなどの低木林となり、一部には *Sasa* を優占種とする草原も広がっている(荒金, 1972)。今回の調査は福岡県在住の入江平吉氏によって、ヨシブから坊ガツルにかけての大船林道沿いの標高1000~1200m付近で行なわれた。同地の植生はミズナラ、ミズメ(ヨグツミネバリ)、ミズキ等が優占しハリギリ、ホオノキ、サワグルミ等も多く、ブナも少ないながら自生するが、ヒミ、ツガはないとの事である。なお、各種 *Pidonia* は主としてゴゴメウツギの花上から採集された。種々御教示頂いた入江氏に御礼申しあげる。

調査年月日: 1974年6月30日

調査地: 大分県玖珠郡九重町及び直入郡久住町大船林道

1. *P. puziloi* (SOLSKY) フタオビノミハナカミキリ, 8♂♀, 11♀♀.
2. *P. signifera* (BATES) ナガバヒメハナカミキリ, 18♂♂, 9♀♀.
3. *P. muneaka* (TAMANUKI) ムネアカヒメハナ

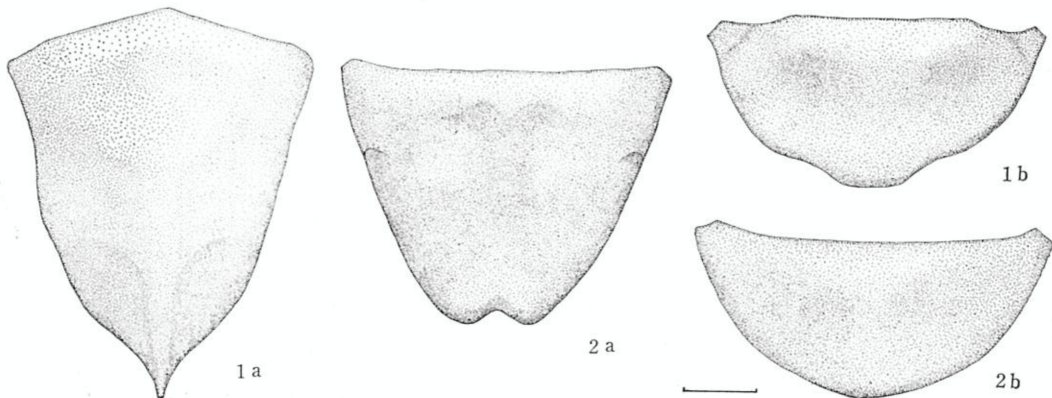
カミキリ, 14♂♂, 10♀♀.

前報において *discoidalis* 種群は雄の median lobe と末端節腹板の形態により二群に分けられることを報告した。当地の雄は median lobe の先端突出部が幅広く単純に尖り、末端節腹板の後縁中央はやや幅広い三角形に弱くえぐられる点で本種と同定した。雄は前胸が赤褐色で側縁の突出が鈍く、小楯板は前胸と同色である。maxillary palpus 先端の外縁は突出し四角形を呈する。雌は上翅に一对の黄色の縦すじを持ち、末端節背板の後縁は弓状に湾入する。このような本種の特徴は、四国の小田深山等の低山帯に分布するものと種々の点で一致する。

本種は玉貫(1942)により *discoidalis* の aberrant form として記載されたものである。林(1969)は多数の標本を検し、これを種に昇格し、白山山麓以西に分布する原亜種その他、北アルプスに産する ssp. *tamanukii* と伊豆半島と富士山付近に産する ssp. *amagisana* の三亜種に分けた。しかしながら北アルプス島々谷産9♂♂(25. vii. 1974, 窪木幹夫採集)、天城峠産2♂♂(4. v. 1966, 桑久仁雄採集)、芦生産2♂♂(30. v. 1971, 水沼哲郎採集)、護摩ノ壇山産3♂♂(1. vi. 1969, 奈良一採集)、大山産2♂♂(20. v. 1974, 足立一夫採集)はすべて末端節腹板後縁中央がU字状にえぐられ median lobe 先端突出部が鉤状に曲って尖るもので *discoidalis* の模式産地である日光地方のものとは一致した。すなわち本州に分布する *muneaka* は *discoidalis* の synonym であり、四国、九州の低山に分布するものが真の *muneaka* に当ると思われる。

4. *P. discoidalis amanoi* HAYASHI, 2♀♀.

本亜種は英彦山(標高約1100m)より採集された雌に基づいて記載されたもので、四国に分布する *P. discoidalis shikokensis* CHŪJŌ et HAYASHI に似ている。当地の雌の前胸は前後縁部を除いて黒色もしくは黒褐色で小楯板は前胸の前後縁部と同色の黄褐色である。上翅は黒色で一对の黄褐色の縦すじを持つ。末端節背板の後縁は鋭く突出する。この雌



第1図 雌腹部末端節背板(a)と腹板(b). (Scale=0.3mm)

1. *Pidonia discoidalis amanoi* HAYASHI

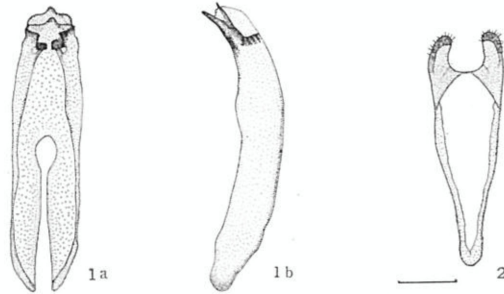
2. *Pidonia muneaka* (TAMANUKI)

の末端節背板の末端が突出する個体は模式産地の英彦山や九重山群、祖母山から知られている。

先に本誌 (Nos. 21/22) で報告した覚書(3)の *P. sp.* は雄の median lobe の先端突出部が鉤状に曲って尖り、末端節腹板の後縁中央がU字状にえぐられ、雌の末端節背板の末端が突出するもので *P. discoidalis shikokensis* CHŪJŌ et HAYASHI に当るものと思われる。また雌の末端節背板の後縁の突起は四国、九州産の *discoidalis* の一般的な特徴と思われる。

5. *P. grallatrix* (BATES) オオヒメハナカミキリ, 11♀♀。
6. *P. sp.*, 5♂♂, 9♀♀。

本種は従来 *P. insuturata* (Pic) や *P. similima* OHBAYASHI et HAYASHI と混同されていたが特異な雄交尾器の形態により別種と扱った。林 (1968) は *insuturata* の分布地として本州・四国をあげ九州については疑問符を付記している。また従来



第2図 *Pidonia* sp. の雄交尾器 (Scale=0.3mm)

1. Median lobe: a. 腹面, b. 側面; 2. Lateral lobes. *P. insuturata* (Pic)? として九州、四国から報告されて来たものは本種に該当するものと思われる。上翅の斑紋は *insuturata* に似て、雄の末端節腹板の先端が明瞭に凹状を呈さない点では *simillima* に似る。前胸の側方の突出は変異に富み両種の中間的形態を示す。このような点が本種が長い間 *insuturata* や *simillima* と混同されて来た原因と思われる。しかし雄交尾器、特に lateral lobe は特異な形態を呈し、他の *Pidonia* 亜属とはまったく異なり、先端が厚大し内側に彎曲している。筆者の知るかぎりでは、本種は九重山群の他、英彦山、祖母

山、国見岳等の九州の山々や四国の高地帯に分布する。九州における本種の出現は比較的早く5月中旬に上記の山々の標高1000m付近に出現し、7,8月には高地帯に及ぶ。なお、本種については後日改めて発表する予定である。

7. *P. simillima* OHBAYASHI et HAYASHI ニセヨコモンヒメハナカミキリ, 10♂♂, 17♀♀。
8. *P. amentata* (BATES) セスジヒメハナカミキリ, 9♂♂, 6♀♀。
9. *P. debilis* (KRAATZ) チャイロヒメハナカミキリ, 11♂♂, 10♀♀。

以上のように大船林道からは9種の *Pidonia* が採集された。この中で *discoidalis* 種群に関しては雌の末端節背板の形態により2種に分けたが雄はすべて *muneaka* であり末端節腹板の後縁中央がU字状を呈する *discoidalis* は採集されなかった。しかし英彦山産雄の末端節腹板には二型あり当地でも今後の調査により *discoidalis* の雄も確認されるものと思われる。

なお、採集された総個体数は157頭、♂は52%、♀は48%であり、*simillima* と *signifera* が最大の優占種であるが、それらの優占度は比較的低くおのおの17%であった。(東京農大)

○ドウガネチビマルトゲムシの食性

ドウガネチビマルトゲムシ *Lamprobyrrhulus hayashii* FIORI, 1967 の食性として筆者はゼニゴケ(苔類)の仮根を記録(1962)したが、その後、東京都北区にある西ヶ原農業技術研究所の構内で地面に生えた藓類上に、本種の卵・初令幼虫が多数みられた(15. V. 1963)。また産卵に飛来した成虫も観察できた。初令幼虫がいつでも葉を食べていることから、苔類の場合も主として葉を食べるものと思われる。卵は黄褐色でほぼ球形(0.5~0.6mm)。観察の機会をくださった長谷川仁氏に感謝申し上げます。(横浜市港北区, 林長閑)

甲虫談話会

会費(1カ年)1000円、次号は9月中旬発行予定、投稿〆切は8月15日。
発行人 黒沢良彦
発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園
国立科学博物館動物研究部内
電話(364)2311, 振替 東京 60664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥4,500, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都内及び第一地帯: 3箇以下 ¥750, 4個以上 ¥650 (以下同様), 第2地帯 ¥850, ¥650, 第3地帯 ¥950, ¥750. 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25
電話 (03) 811-4547

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号 100本 160円)

なお、無頭針00号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6
電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)
振替 東京 21129

志賀昆虫普及社